

所属 高知県立須崎工業高等学校
氏名 和田卓義
RG SH5

1 研究の背景

本校は、実業高校ということもあり、資格取得等実技を伴う教科が多く。そのため、教員と生徒の両方が、平日においても補習等で対応しているのが実情である。こうした中で、いわゆる普通教科は就職に直接結びつかないものと考えているか、または、多くの生徒についていえることであるが、入学時よりそれを苦手なものと考えているということがある。苦手科目ととらえている生徒は、特に英語について、拒絶反応が顕著で、書くことはおろか読むことさえも自ら取り組もうとはしない場合がある。そのような場合は興味を持たせる手段を探すことも困難になり得る。どうしたら英語を聞こうとするか、または拒否反応なしにどうしたら英語、または文字を読もうとするか。そしてこれが一番困難なことであるが、どうしたら単語、または文字を憶えてくれるか、こうした事柄を研究することが有意義であると考えられる。

2 リサーチクエスチョン

英語を苦手教科と考える生徒に対してどのように対処すれば拒絶感が和らげられるか。

3 予備調査

- (1) 学期始めにアンケートを実施（全学年）
- (2) 中間考査にインタビューテストを実施（3年生）
- (3) 授業、期末考査にリスニングを多く含むものを実施（全学年）

予備調査1 授業観察の結果

- (1) ウォームアップにおけるゲームには、英語に対して拒絶感を示す生徒も、おおむね積極的に取り組むことができる。
- (2) ペアワークなど他の生徒と一緒に活動する場合、参加する度合いが高いと思われる。ただし、その場合は、相手の生徒や教員、あるいはアシスタントに全く頼り切ってしまう場合も含まれる。

予備調査2 英語力を示すデータ

- (1) インタビューテスト
- (2) リスニングを含む定期考査
- (3) 1学期中間までの基礎学力向上テスト

予備調査3 アンケート、授業評価の結果

アンケートの結果では、英語に対して拒否感を示す生徒も英語に興味を持っている場合があるということがわかった。ただし、中学校の早い時点で躓いてしまい、その後全く授業に参加していない生徒もいる。また、その中には学習困難や障害が原因である生徒も含まれる可能性がある。

4 仮説の設定

(1) 仮説

仮説1 どういう事柄においても達成感を得られたら、自信につながるのではないか。

具体的には、考査の分量を増やして内容を生徒が取り組みやすいものにするとう効果的である。

仮説2 個別指導の時間を充分とることができれば、学力の向上につながるのではないか。

例えば、長期休業中を利用しての補力補習。

仮説3 音楽や映像を使って、生徒に興味を持たせることが可能ではないか。

(2) 実践の方法

基礎学力向上対策の小テストの内、週1回を英語に設定して簡単な単語テストを行う。検査前には試験範囲の単語や熟語を含むものにする。1学期の評定において不振者は夏季休業中4～5時間の補力補習を行う。また、ウォームアップの時間を使って歌を聴かせる。

5 計画の実践

基礎学力向上対策の小テストを1学期中間検査まで実施した。点数の変化からは、それほどの効果が見られなかったクラスと、平均点の向上がある程度見られたクラスにはっきりと分けられるように思われる。小テストの時間が限られるため、単語の範囲を少なくしたが、テストの設問を単純にすると生徒の達成感が得られないかもしれないので、文章を含む設問とした。しかしながら、家庭学習の時間をとることが定着していないので、小テストの準備ができなかったものと思われる。従って、小テストの実施のみでは効果が得られないものと思われた。

そこで、小テストの点数変化の少なかったクラスに対して、1学期期末検査以降は単元の目標を含む、単純なパターンを授業中に練習してその内容を検査に入れるということにした。具体的には、1学期期末検査「動名詞」、2学期中間検査「分詞の形容詞的用法」、2学期期末検査「S + V + that節」である。それぞれの文法事項を1つまたは2つ使うだけで、意味の異なる文章を複数作るという作業である。

6 実践の結果

授業中の作業も、最初は慣れるまで時間がかかったが、回数を重ねるにつれて、検査の点数をとることができるということが生徒に理解され始めた。その結果、1学期末検査で成果を出すことのできなかった生徒も、2学期末検査ではその殆どが設問に回答することができた。また、できあがった文も、最初は文字の間違いが多く見られたが、次第に間違いに気を付けるようになり始めた。

7 結果の検証

やはり、どういう事柄においても達成感の得られた生徒は、直接それが語学修得につながらなくても、授業に関しては自信を持つことができた。しかしながら、基礎的な学力が身に付いていない生徒、中学校の初期段階で授業についていけなくなった生徒は、教える側からは単純な作業に見えてもその作業すら行うことができない場合がある。例えば、単語のみを覚える作業も、そうした作業を今までやったことのある生徒にとっては容易であるが、今まで授業に殆ど参加していない生徒にとっては苦痛である。それに対して、長い文を多く書かなければならない作業などは、憶える事柄が単語の意味や綴りではなく、単語の変化のパターンである代わりに、できあがるものはひとまとまりの文であるため、達成感はより得られると思われる。

8 成果と今後の課題

様々な活動を通じて、単純な作業でも、生徒に達成感を与えられない事柄と、たとえ困難な課題であっても生徒が積極的に取り組むことができる内容のものがあるということがわかった。その中でも、生徒が、どの時点で躓いてしまったのかを発見することが重要であると思われる。理解の程度に合わせて充実感の得られる内容の教材を与えることが必要である。ただし、学習困難や障害を抱える生徒については、こうした生徒は今後さらに多くなると思われるが、授業中の達成感を得る

ことができ、最終的に評価に結びつけることはできても、それが語学修得に直接つながらない可能性が少なからずあるということが心配される。